

も く じ

特集：青少年と文化活動

座談会

高校生の演劇活動

—全国高等学校総合文化祭を通して—

沖田岑夫 4
内木文英
佐野由恵
田原昭之
(司会)

青少年文化としてのコミック
遊びの中の文化

石ノ森章太郎 11

世界の日本人となるためには

見城美枝子 13

三枝成彰 15

第十三回全国高等学校総合文化祭

未来へ向けて燃える高校生——岡山大会

17

我が県の文化行政——㉔

香り高い県民文化の創造をめざして 山梨県 19

特色ある文化活動——⑪

オーケストラ・アンサンブル金沢の設立

オーケストラ・アンサンブル金沢 22

第5回国民文化祭・愛媛90

事業別実施計画決まる(2) 24

・平成元年度税制改正について 25

・平成元年度
こども芸術劇場公演について 26

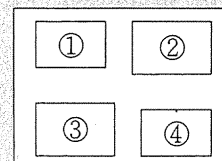
・平成元年度
青少年芸術劇場公演について 27

・文化振興会議の開催について 29

- ・文化庁行事報告
及び予定……………30
- ・「美をもとめて」
放送予定……………30
- ・国立劇場ニュース……………31

表紙写真紹介

第12回全国高等学校総合文化祭
(熊本開催)



- ①マーチングバンド・
バトントワリング部門
- ②パレード
- ③吹奏楽部門
- ④邦楽部門

題字デザイン※桑山弥三郎

座談会

高校生の演劇活動

—全国高等学校

総合文化祭を通して—

沖田 岑夫

内木 文英

佐野 由恵

田原 昭之
(司会)

田原 本日は近年文化の時代といわれている

中で特に若者の文化についてお話を願いたい
と思っております。とは言いましても、範囲
が広いものですので、高等学校の生徒さんを
中心に、いま演劇活動がかなり全国的にも活
発に行われておりますが、そのへんを中心に
若者の文化活動への参加というようなことで、
お話を聞かせていただければと思います。

最初に全国高等学校文化連盟の会長さんの
ほうから、昭和五十二年にスタートした全国
高等学校総合文化祭（以下全国高文祭と省略）
のねらいとか、これまでの実績などについて、
お話いただければと思います。

全国高等学校総合文化祭の意義

沖田 各高等学校の実態からまず申し上げま
すと、どの学校にも体育系のクラブと文化系
のクラブがあるわけですが、生徒たちは、傾

向としては体育系のほうに入りたがりです。

全国的な趨勢は六割ぐらいの生徒は体育系に
所属し、四割ぐらいが文化系に所属する。と
ころがその内容が、文化クラブの場合は体育
クラブのように活発でないもののがかなりあり
ます。だから、四割の生徒のうちさらにその
半分ぐらいしか実際は一生懸命活動していな
い、というのが実態ではないでしょうか。そ
ういう実態にかんがみ、このままではいけな
い。俗にいう灰色の高校生活とか大学予備校
的な存在の高等学校ということではないけない
やはり生徒の活動を活発化しなければならな
いということが、強く叫ばれるようになってま
して、各県にぼちぼちと高等学校文化連盟（以
下高文連と省略）が組織され各県ごとの高等
学校総合文化祭（以下高文祭と省略）が実施
されてまいりました。一番古いのは私の記憶
では石川県の昭和二十六年の高文連結成であ
り高文祭の実施ではないかと思えます。その



後、それぞれの県に高文連が組織されるようにな
ってまいりました。そして全国的な集いに
それを推し進めていこうという動きが起こつ
てまいりまして、昭和五十二年に千葉県で第
一回の全国高文祭を開いたわけです。その時
から何とかして文化のインター・ハイという
位置付けをしていこうではないかという意気
込みでやってきました。更に各県の連盟を全
国的に組織化した全国高等学校文化連盟（以
下全国高文連と省略）も昭和六十一年二月に
結成され、現在では四十一都道府県が加盟し

ております。この全国高文連を中心に、全国の高校生の芸術文化活動の振興を図っていきたいと考えているところであります。

高校演劇の始まり

田原 内木先生、いまお話がございました高文祭の中でも演劇部門は、以前から全国的な組織が作られていて、コンクールというような形で古くからスタートしていますが、高等学校の演劇活動のねらいはどういうところにあるのでしょうか。

内木 戦後間もなくの昭和二十二年に、まず東京で組織ができて第一回のコンクールを開きました。もう四十二年前になります。僕は第一回から生徒と一緒に芝居をつくってコンクールへ出し、参加してました。ところが上手な芝居をつくる学校がありまして、書いても書いても落ちたわけです。三回目に初めて入選したんですが、それでも東京都第六位という成績で、あまりいい成績じゃなかったわけです。しかし、生徒と芝居を一緒につくっていくと、何とも言いようのない充実感がありました。私だけに充実感があつたわけではなく、生徒は生徒なりに大変な充実感を感じていたようです。当時の生徒たちと一生の付き合いをしているわけです。この素晴らしいものを、何とか学校教育と結び付けて学校の中に、例えば、演劇という科目があつた方がいいじゃないか。あるいは演劇科の専門高

校があつた方がいいじゃないかという考えを持つようになりました。生徒と一緒にクラブ活動としていい芝居をこしらえていくという一面と、学校教育とをどう結び付けていくかということを考える。その二つのことを旗印にして全国に檄を飛ばしました。その当時、芸術課は文部省の社会教育局にありました。芸術課の人たちも、演劇活動は非常にいいことだからやろうということ、文部省と共催の指導者講習会という形で第一回大会を東京で開いたわけです。昭和三十年の八月初めでした。神田の一橋講堂が満員になった時は感動いたしました。

演劇は非常に盛んになりつつあつたんですが、理解されない部分もありました。学校の中で演劇をやるなんておかしいじゃないかという空気もありました。音楽や書道や美術といったものが芸術科目の中にあるんだから、演劇もその中に入れたらいい。学校の科目の中に演劇があれば、理解を示してくれるだろうというようなことも考えたわけです。

十何年か前にアメリカへ行きました。ニューヨークにスクール・オブ・パフォーマンスという学校があるんです。四年制の高等学校で、半日そこへ行って生徒が動き回るのを見ていたんです。授業が終わった時に演技指導をやっていた先生が、「演技の勉強は、自分の身体の中に隠された真実の自分を発見することだ」というようなことをおっしゃいました。これは演技だけじゃないと思うんで

すが、表現を学ぶということは、結局自分に気付くことだと思ふんです。それだけでも演劇というものを学ぶ意味があると思うのです。

高校演劇活動の動機

田原 佐野さん、高校三年間、演劇に取り組み、実際に舞台にも立たれたわけですから、動機は何だったんですか。

佐野 たまたま同じクラスで友達になつた人が、演劇部の活動が盛んのようだから「私はそこに入る」と言っていて、私も特にこれといってやりたいものがあつたわけじゃなかったから、それにくっついて入ってしまったという感じですが、入ったら友達よりも私のほうが夢中になつてしまつたわけです。でも、だれに聞いても、何となく足を踏み入れたら、病み付きになつてしまつたみたいなのが、多いですね。

田原 病み付きというのは、どういうことですか。演ずるといふことの喜びとか楽しみですか。

佐野 演ずることも観ることも、すべてが面白いというか、すればするほど魅力的なんです。演劇っていうのが。クラブをやるまでは特に芝居を観に行つたわけでもないし、それまでに何か芝居を観て感動したことがあつたという記憶も特にないけれど、やってみるとうちに何かひきこまれて……。演ずることも面白いけれど、ほかの高校生が芝居を演じて



沖田 岑夫
全国高等学校文化連盟会長

る姿を観ているというのも、とても面白いんです。ほかの商業演劇とは違ったパワーがすぐあつて、高校演劇がそれ楽しくなったという感じですよ。

田原 高校生はそれぞれ進学とか就職の問題を持つているわけですが、そういう問題の一方でクラブ活動に打ち込んでいくというギャップは、あまり感じなかったんですか。

佐野 私がいた高校は進学希望者が多い学校ですから、二年の秋の学校祭が終わるとほとんどみんなクラブを引退します。でも、私はそこですっぱりと引退するのに未練がありました。自分は演劇部だったけど、特に大きな大会に出られたわけでもなかったから、何か一つやっておきたいなと思っていたところ、全国高文祭が開催されるということで、全国高文祭の総合開会式に参加するためのオーディションがあると聞いたんです。ただその日ちょうど模擬試験があつたものですから、ぎりぎりまで悩んで、最終的にオーディション

を受けに行っていました。

田原 三年間を振り返ってみて、やはり充実した高校生時代だったわけですね。

佐野 そうです。まわりの友達も勉強、勉強とやっていたんですが、それよりもっとすごいことをやってきたような気がします。卒業してから、むしろそう思うようになりました。

田原 沖田先生、やはり全国的な大会をやることが、高校生の文化活動にとって大きな刺激になるだろう。単に文化活動をするだけではなくて、同じことをやっている仲間との交流みたいな場が与えられるというのは、人間形成にとっても非常にいいだろうと思いますし、全国高文祭への一つの期待があるんだろうと思いますがいかがでしょうか。

高校生の文化活動の意義

沖田 私は高等学校の学習活動の全般を見直すべき時期に来ているだろうと考えますね。



内木 文英
劇作家・全国高等学校文化連盟演劇部会長

従来の高等学校の三か年間は、どうも記憶を中心とした学習、そして教科学習がまず第一で、あとのことはさておいてという教育がずっと行われてきたような気がします。結果的にどういう人間ができたかというと、素晴らしい大学に入った。けれども、人間として何も持っていない。本当の知識もなければ趣味もないというような人間がたくさん生まれてまいりました。国際的な視野に立つて、いま日本国民が飛躍していかなければならないという時代に魅力のない日本人がたくさん生まれてきているような気がします。高等学校時代には学習活動も大事だが、生涯を通して持てるような趣味を、身に付ける、あるいは自分が持っている個性を、いかに伸ばすか、自分の人間としての魅力の基になるようなものをどうつくり上げていくかが大事だと思っていますね。ですから、学習活動のほかにクラブ活動がぜひ必要になってくる。しかもそのクラブ活動も従前はスポーツ、体育中心だった。それだけで本当にいいのか。文化活動についてもやはり高校生の時代からではなからうか、というような声がたくさん出てまいりまして、その積み重ねが全国高文祭の年々の発展につながっていると思います。そして文化クラブは、発表の機会が多ければ多いほど、それを目標にして毎日毎日の練習をするわけで、これを集大成をする場として全国高文祭は非常に大事な存在になっていると思います。

コンクールについて

田原 いろいろな発表の機会を与えることはとても必要なことだと思います。その中で高校演劇などは一種のコンテスト形式が確立していて、それを目標に一生懸命みんなが練習を積んで参加するということがあるんですが、いま、高文祭は、すべてがコンテスト形式になってるわけではないですね。

沖田 将来的にはすべてコンクール形式に持っていくことになるだろうと思いますが、現在四十七都道府県すべての全国高文連への加盟を促進するという面から、先ず底辺を広げなければなりません。いきなりコンテストをやるれるのではとても駄目です、としり込みしてしまふところもあるからです。ですから、演劇のように部門によりやれるところが既にコンクール形式をとっておられる。それから、どうも底辺の拡大が十分でないというところ



佐野由恵
中京大学生



田原昭之
文化庁文化普及課長(司会)

は、まず参加することに意義があるんだから、参加してくださいということでも手を広げているというところでしょうね。

それともう一つは、将来コンクール形式にする場合に問題になると思うのは、一般社会人が持っている流派とか、審査の仕方の違いです。邦楽にしても何流、何流、あるいは吟詠にしても、それぞれの流派があつて採点の仕方が違います。しかし、私は高等学校の文化祭であるから、審査員は、高校教員であるべきだろう。そして流派にとらわれない審査方法を確立することが、解決の道だろう。そういうことを総合的ににらみながら、将来を考えているところです。

内本 コンクール方式には、演劇でも問題はあるんです。どうしても最終的には審査員の主観で決められてしまうんじゃないか、ということなんです。しかし、いまのところ、コンクールを目標にして、全国大会にぜひ出たい、苦勞は多いけれども力を合わせて、いい芝居

を作ろうじゃないかといった動きがあり、コンクール方式には少し無理があるけれども、コンクール方式をとらざるを得ないという部分があるということです。

佐野 中部圏はみんな中部方式という形で、高校生も講評委員として審査に参加しているんですが、先生方の審査員と生徒側の講評委員と意見が真つ二つに分かれることがあるのです。先生方はとても推しているけど、高校生は「あれは……」という芝居があつたり、そうかと思うと生徒のほうが「これはいい」と思うのに、先生たちが、「いや、あれでは……」という作品が出る場合がよくあります。そういう時に一体どっちの意見が重要視されているのかとよく疑問に思いました。

内本 うまいからいいんじゃないんですね。つまりカッコよくきれいにできただけでは駄目と。下手でももちろんそれが気になって、いくら情熱が込められても伝わってくるものがなくなってしまうんですが、つくっている連中たちの思いが、観ている者の心に強く響いてくるものがない舞台なんだという判断をします。

演劇のテーマ

田原 高校の演劇は歴史が非常に古いわけですが、実際には題材とか演ずる生徒さんなんかの考え方も、時代時代によって多少は変わってきているものですか。

内本 三年前の大阪大会だったと思うんですが、老人問題を扱った作品が何本か出ました。登校拒否問題が話題になったり、時には基地問題が話題となって劇化されて表現されるということもありました。扱われる題材はその時代の高校生が一番関心を持っている問題ですね。

舞台の形式では、昭和二十年代にはリアリズムの芝居が多く、最近では、現在の演劇スタイルを打破した形で小劇場スタイルの芝居がいくつか現れてきています。我々教員はやや保守的な部分がありまして、安定した舞台でないといっているというところがあるんですが、生徒たちはそうではなく、例えば、小劇場の芝居なんかに触れると「あ、これだ」という気持ちになって、それを取り入れて、大声で叫んで演じたりする。最近はやりのパフォーマンスのようなものもできてます。現代の生徒たちの持っているやむにやまれぬ気持ち、強く表れると審査員はその新鮮さに打たれて、それに票を入れるということもあるようです。

学校の中の演劇活動の位置付け

沖田 私どもが感じる演劇の魅力というのは、演劇をやるためにはまず文学の勉強をしなければなりません。作者の作ったシナリオがどういうものであるかということ、よく理解できるような、あるいは時代考証を含めた歴

史的な知識もなければなりません。それから、観客に何を訴えるのかということの技法も必要でしょうし、弁論の手法も必要でしょう。演劇は総合的な芸術活動ではないかと思うんです。そこに特に演劇に魅力を感じる人が多く出てくるゆえんがあるのではないか、と思います。

更に文化クラブのいろいろな発表のなかで特に演劇が特異性を持っているのは、自分たちは何を主張するかというものを持ちながら舞台の上に立っていることです。

ただ、裏返すと、そこに怖い、どきどきするようなものを覚えることがあるんです。保守的な環境にある学校では、そういうものを演じてはいかんということで問題が生じるということがないわけではありません。



内本 常識的に演じて芝居にはならないわけで、常識からはみ出た部分をうまく劇的に構成しないと芝居にはなっていないわけですね。そのはみ出た部分をどうするか。例えば、学校の考えている保守的な部分と食い違う場合にはどうするか。そのへんが問題です。

田原 高校生の場合は学校の中の活動というところで制約が出てくるわけですね。演劇に限らず、それ以外のいろいろなクラブ活動でも、いま先生方から出たように、若い人たちの考えをいろんな形で実現していくのは相当抵抗があるものなんです。

佐野 ちょっとニュアンスが違うかもしれないですが、生徒が求めているものと、先生が考えることにいささかずれがあると思うんです。生徒はテレビでやったり、名が売れている劇団の芝居なんかを観ると、それを自分のものとしてとらえるんじゃないかって、そのまま真似して持つて来るようなところがあるんです。先生はそれを観て、そういうのはよくないとはねつけようとするとところがあります。でもそれでは先へ進まないから、最初は真似事かもしれないけれど、そこから何とかして自分たちのものに作り替えてみたいということがよくありました。

また、私の学校は顧問の先生が脚本を書かれる方だったので、その方がいつも脚本を書いて下さっていたんですけど、その先生のほうがぼつと抜きだしたようなことを考えだしてしまったりする時もあったて、結構生徒のほ

うが戸惑ったりすることもありました。

指導者 vs

田原 よくいわれることですが、特に高校生の場合に各種のクラブ活動は指導者いかにあると。極端に言えば、例えば野球であれば監督さんが代わったら、その高等学校はとたんに駄目になる。あるいは合唱にしても指導者に恵まれているところは、その方がおられる限り非常に活発にやるけども、代わられるととたんに沈滞してしまふ。そういう意味で指導者を今後養成していくことが、高校の文化活動に刺激を与えると思うんですが、どうでしょうか。

沖田 高校生の部活動の中で指導者の立場に立つ顧問のありようは大きく影響します。そこで全国高文連としては、今年度から学習会を開きまして、指導者を育成していくにはどうすればいいかということを中心にテーマにした話し合いを進めていこうと思っているところです。優れた指導者は一般的にどうなのかということを見ますと、非常に独創的で創造力豊かな指導者、これが素晴らしい結果を生んでいます。日本人が国際社会の中で一番不足しているといわれるのは独創性であり創造力であるといわれているわけですが、これを顧問のみならず生徒にも何とか植え付けていかなければならない。そこに高文連の大きな使命があるんだろうと思います。



問題は独創性あるいは創造力ということは、半面非常に難しい点もあるんです。極端な考え方をするものが、すべてよしとはしませんし、やはり、学校教育の範疇の中で、良識を基盤にした独創性豊かな指導者を一人でも多く育てていきたいと考えているわけです。

内木 指導者の問題ですが、アメリカの大学には全部といっていいほど演劇科があるんですね。そこでは理論も教えてるんでしょけども、演技実習、自分の体を使って表現する、声をしっかり出す、といったことをしっかり教えています。アメリカはスピーチ教育が義務教育で必修なんですね。そのスピーチ教師のライセンスは国語などとは別個の独立したものです。大学の演劇科を卒業しなくては取

得できません。その先生たちが各学校でスピーチを教える。スピーチの授業の三分の一は、多くの聞いた限りではドラマですね。身体表現を学習する。イギリスでは聞くところによると、一九六〇年代から、演劇を学校教育の中に取り入れようという運動が始まったんです。それはシアターとドラマを教育の中にどう位置付けるかということです。シアターというのは劇場に行っているいい芝居を生徒に観させる。ドラマというのは自分の体である体験をさせて、表現能力を高め、自分に気付かせるということのようです。

今度の学習指導要領の改訂でも、音声言語の表現について、国語の分野で相当大きな分野を占めるようになってきました。ただ現在の教育現場の国語教育の中でそれをストレートに生かせるかというと、国語の先生は漢文をやったり、枕草子や源氏物語をやったり、大体文学専攻でして、なかなか表現のほうへは行かないでしょう。ですから、いまの大学教育の中で、演劇教育、表現教育あるいは教育関係の大学の学生たちに、少なくとも演劇の基本を教えるような講座を設けることを、どこかで考えていかないと、世界の情勢に乗り遅れるんじゃないかという感じがします。

演劇と人間形成

田原 佐野さんは三年間演劇をやられたわけですが、その三年間をどう受けとめています



か。

佐野 演劇をやって内気な性格が活発になったとか、人前でしゃべれなかった子がしゃべれるようになったということはよく聞いていたんですが、本当にそういう方も身近にいました。何か打ち込めるものというか、自分が自分であるべき場所というのか、あるいは見えなかった自分が見えてきたというのか……。全然違った人を演じるわけだから、その人の立場に立つてものを考えなくちゃいけない。そうすると、いままでは自分一人ものを考えてきたことが、私はこう行けれども、この人の立場だったら、こうは行かずにああ行くかもしれないというように、相手の立場になって考える。自分を主観的にみて、そのままとらえるだけでなくて、一歩下がって自分をもう一度客観的に見詰め直す。演じる時も、芝居をやっている人たちはたで観ている時も、そういうことが必要になってきます。それが一番のメリットじゃないかと思われれます。田原 いまの若い人は音楽にしても何にしても非常によくこなすというのか、そういう意味で文化活動に参加する機会が、だれでも手軽にある。例えば、音楽が好きな人はちよっとお金を出せばトランペットでも何でも買え

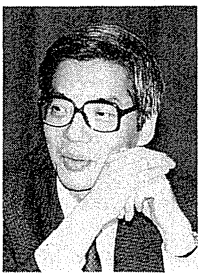
るとい時代になってきている。そういう環境は整っていると思うんです。そういう中で高校生の文化活動は、体育系に比べると今一つというところがありますが、それは何が原因になっているんですか。

内木 去年全国高文祭が熊本で開催されましたが、演劇部門で一番よかったのは広島県の舟入高校の「お父さんのチンチン電車」という伊藤隆弘さんという指導者の作品です。彼はずっと続けて舟入高校の演劇部を指導しています。舟入高校は全国大会の常連校で、広島ではピカ一の芝居をやっているというので、そこへ入って来る生徒もいるようですね。つまり、野球の名門校があつて、野球少年たちはその学校を目指すということがいわれますように。関東には千葉県の船橋二和高校というのがありますが、なかなか優れた舞台を作る学校で有名です。埼玉県には秩父農工がごぞいます。

田原 そうすると指導者の問題になりますね。

文化活動振興の必要性

沖田 我田引水になるかもしれませんが、総括して文化活動というのは感動する心を育て



る活動だというふうに思います。新しい教育課程でも日本人の心を育てる教育に力を入れようということ力を説いております。そういう意味からも文化活動は非常に大事だと思います。ことに演劇の場合は感動する心を育てることからみれば、びったりですね。

それから、文化活動のもう一つの目的は、自らの個性を知ることとその伸長を図る活動ということになります。日本人はいままで個性と見られてきましたが、これから国際人として活躍していくためには、やはり、強烈で、しかも良識的な個性を持たなければならぬ。それを伸長していくためには、やはり、文化活動を振興する必要があるだろうと思います。ただ、文化活動は、スポーツのようにこれが一位、二位、三位といかない特殊性があります。その特殊性に目を向けてくれるよう、日本人全体の文化レベルが高まってくれることを期待するんですが。

内木 日本の高校演劇はヨーロッパやアメリカにも例がないほどさかんなんです。世界では日本だけじゃないでしょうか、高校演劇が興って、こういうふうコンクールを開いて全国大会にまで持ち上げていくような行き方は。ばくらとしてはせっかくこまで来たんだから、何とかこれからのいい方向へ持っていきたいと考えています。

田原 きょうはお忙しいところを、また非常に楽しくて貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。